

キジバトの繁殖

与那城 義春
(沖縄県立博物館)

Record on the Breeding of *Streptopelia orientalis*
in Chinen High School of Yonabaru Town, the Okinawa Pref.

Yoshiharu YONASHIRO
Okinawa Prefectural Museum

はじめに

沖縄県内に生息する鳥類の繁殖生態研究は特定の種を除けば意外と少ないように思われる。特に身近な留鳥の繁殖生態に関する調査・研究は殆ど実施されてないようである。

本邦では、キジバトの生活史に関する研究が羽田・野沢(1969)によって詳細に報告されている。

筆者は身近な留鳥の中でキジバトの繁殖調査(1996)を実施したので、その繁殖状況を報告する。

1. 調査地の概況

キジバトの繁殖調査は沖縄本島南部地区与那原町内の東部に位置する県立知念高等学校の校内で実施した(図1)。校内南部の正門付近に建設されている同校の図書館周辺には栽培されたハウオウボク、カンヒザクラ、トックリヤシモドキ、ソテツ等が成育している。また、図書館の出入り口側には校舎があり、裏側には人家がある。

キジバトの営巣木は樹高約7.5mのトックリヤシモドキであり、ほぼ水平状態に伸びている長い葉の中央部に本種の巣が造られている。葉上の巣は地上高6m程の位置にあり、その付近に成育しているカンヒザクラの枝葉によって殆ど被覆されている状態であった。

2. 調査方法

今回の繁殖調査は巣を中心にしてキジバトの造巣期(造巣開始日、1996年2月28日)から巣立ちまでの実態を定点観察によって実施した。観察場所は校舎の3階にある地学教室廊下側のベランダに設定し、調査実施日を朝、昼、夕方に区分して自然状態で観察した。雛の巣立ち後、家族期に関するキジバトの調査・観察は諸般の事情により実施できない状態であった。

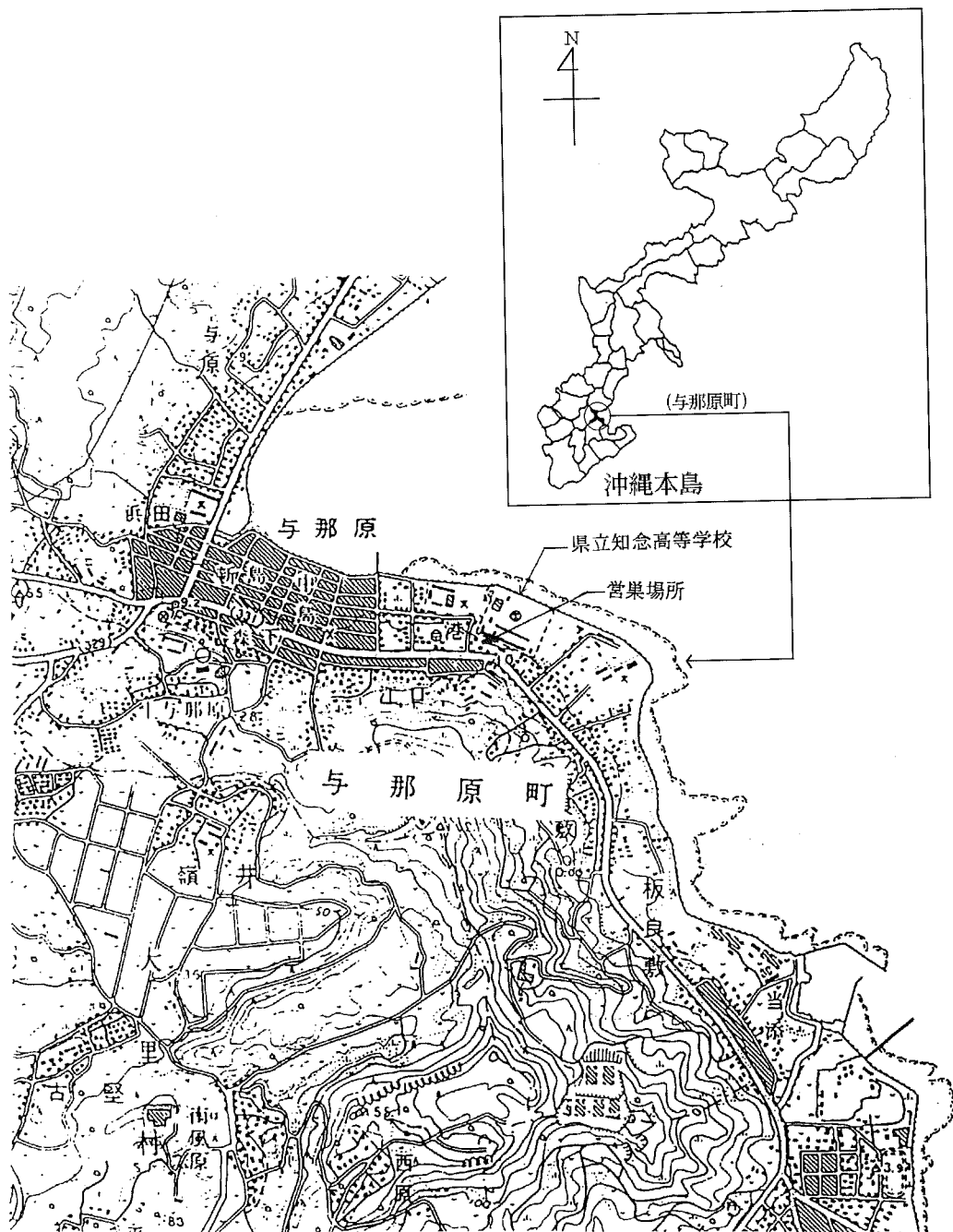


図1 県立知念高等学校と調査場所の位置図

3. 結果と考察

(1) 造巢期

1996年2月28日午前8時20分、1個体のキジバト（性別不明）が校内図書館付近の雑草地に落ちているカンヒザクラの細い枯れ枝1本を嘴で拾い、トックリヤシモドキの葉上に運搬している。営巣木の細長い葉上に数本の枯れ枝が無造作に置かれているだけであり、造巢開始したばかりであろう。巣材を運搬しているキジバトは1個体のみであり、別個体は巣の中や営巣木付近でも観察されなかった。また、造巢中のキジバトは登校生徒の増加によって巣材運搬行動を中止し、営巣木周辺から飛去してしまった。羽田、野沢(1969)によると、巣材を営巣木に運搬するキジバトは雄であり、巣の中にいる雌が嘴で巣材を受け取って巣造りする、ということである。

(2) 産卵・抱卵期

3月3日午前8時10分頃、キジバトがトックリヤシモドキの葉上にある粗雑な巣の中に座っている。多分、雌が産卵のために入巣していると思われる。しかし、そのキジバトは15分後に巣から飛去してしまった。巣の中を双眼鏡（8×30）で観察すると、産座に楕円形の白色卵1個が確認された。

校門の横側から図書館出入口の階段に続く通路があり、営巣木のトックリヤシモドキやカンヒザクラ等の栽培植物は通路付近に成育している。生徒は登下校時にその通路を利用するが、キジバトの繁殖行動等は感知されていないようである。しかし、キジバト自体は営巣木近辺を通過する生徒に対して警戒しているようであり、巣から頻繁に飛去してしまうのである。

3月4日午前8時、キジバトは抱卵中のようであり、巣の中に座って殆ど動かない状態であった。約30分後、別個体が営巣木付近の電線に飛来したので抱卵中のキジバトは急に飛去した。巣の中には2個の白色卵が確認された。間もなく、電線上のキジバトは営巣木に移動し、入巣して抱卵した。

昼食時（午後12時55分～同1時45分）、多数の生徒が賑やかに話し合いながら校内を歩き回るため、特に校門一帯から図書館付近は少々騒々しい場所に変化する。このような状況下で営巣木近辺にある通路も生徒が頻繁に利用するため、抱卵中のキジバトは危機感および空腹感等の影響を受け、抱卵中止して飛去したりする。だが、午後の授業開始後に校内が閑静状態になると、飛来して巣の中に入り、抱卵している。

午後4時30分頃、キジバトは継続的に抱卵していたが、別個体が営巣木付近に飛来したため、巣中の個体は飛去し、抱卵交代した。そのキジバトは日没後も抱卵を継続し、

巢の中を時にしたようである。

その後、キジバトの親鳥は昼夜の区別なしで殆ど継続的に抱卵しているようであったが、営巣木近辺の通路を歩行する生徒の影響によって時々抱卵の中断も観察された。

(3)育雛期

3月21日9時20分、入巢しているキジバトの親鳥は少々中腰のような体勢であるが、その状態をじっと維持している。暫くすると、別個体が営巣木近辺のカンヒザクラの樹枝上に飛来したので、巢の中にいたキジバトは直ちに飛去してしまった。巢の産座には孵化した2羽の雛が確認された。樹枝上のキジバトは営巣木に移動すると同時に入巢し、給餌をせずに抱雛した。次の抱雛交代時刻は概ね午後4時30分から午後5時30分頃の間であり、朝から夕方までに午前、午後ともに各1回ずつの抱雛交代が観察された。

キジバトの親鳥は孵化後の約3日間を昼夜の区別なしで交互に入巢し、抱雛のみに専念していたようである。しかし、孵化した雛が4日目になると、親鳥は抱雛行動を午前9時30分頃に中止し、雛を放置して巢から飛去するようになった。このような親鳥の行動は主に採餌等のためであろう。2羽の雛は巢の中で殆ど鳴き声も出さず、寄り添うような状態で就眠している。

親鳥は概ね午前10時30分頃から同11時20分頃までに帰巢し、雛と向かい合って巢の中に座った後で頭頸部を動かし、餌を戻すと嘴を大きく開いた。雛は直ちに嘴を親鳥の口内部に入れ、餌 (pigeon milk) を飲み込んでいた。雛2羽への給餌時間は約4分間で終了した。給餌後、親鳥は抱雛するが、2羽の雛は3~10分間で就眠してしまうようである。その後、雛が産座で昏睡状態に入ってしまうと、親鳥は抱雛を中止して巢の中から飛去してしまった。放置された2羽の雛は産座で起き上がることもなく、そ



写真① キジバトの雛



写真② 雛に給餌するキジバトの親鳥

のまま就眠していた。

育雛中間期頃の雛は食欲旺盛のようであり、キジバトの親鳥は顕著に成長する雛の要求に対応しているであろう。親鳥は給餌するために日中の帰巢回数も5回程に増加していたが、1回の給餌時間も約6分間となり、長くなっていた。そして、給餌後の親鳥は直ちに巣から飛去したが、2羽の雛は常時巣の中で静かに就眠していた。

ほぼ順調に成長して巣立ちの近くなった雛は日中で親鳥の不在時間になると、殆ど就眠せずに巣の中を歩き回って営巣木近辺の状況の見ながら給餌のために帰巢する親鳥を待ち続けているように思われた。時々、雛は頸部を伸ばしながら、翼を広げて羽ばたいたりしていた。しかし、親鳥は営巣木周辺でも観察されないし、雛の巣立ち準備として給餌回数を減少させているように思われた。

孵化後16日目(4月5日)の夕方、巣立ち直前と思われるキジバトの雛2羽は営巣木の造巣部の余分である葉上に出たり、巣の中に入ったりしている。雛の羽毛は概ね親鳥同様の色彩と模様等を有するが、頸側部には黒色と青灰色よりなる鱗状の模様は未だ無かった。

ところで、2羽の雛は巣の内外で落ち着かないような状態であったが、親鳥は遂に帰巢しなかった。羽田、野沢(1969)によると、キジバトの親鳥は雛の巣立つ数日前から給餌回数を減少させるようになる、ということである。池原・他(1977)によると、国指定特別天然記念物ノグチゲラの親鳥は雛の巣立つ3～4日前から給餌回数を減少させているが、特に巣立ち前日は育雛中間期の給餌回数と比べて激減させるという事例を報告している。いずれの場合でも親鳥は給餌回数を減少させることによって雛の巣立ちを促進させているのであろう。

(4) 巣立ち

4月7日午前8時頃、キジバトの雛2羽は巣の内外や周辺の樹枝上等でも観察されず、既に巣立ちしてしまったようであった。多分、2羽の雛は昨日(4月6日、孵化後17日目)の夕方までに巣立ちしたと思われる。また、親鳥も営巣木や近辺の樹木上等でも観察されなかった。

要 約

1. 身近な留鳥の一種であるキジバト *Streptopelia orientalis* の繁殖生態調査を1996年に沖縄

本島南部地区与那原町内にある県立知念高等学校の校内で実施した。

2. キジバトの造巢期から雛の巣立ちまでの繁殖生態を自然状態で可能な限り観察したが、外部形態によるキジバトの雌雄識別は最後まで不明であった。

親鳥 1 個体のみによる巢材運搬行動は営巢木近辺を歩行する生徒の影響を受けて断続的になったが、4 日間で完成させた。

キジバトの巢材は営巢木近辺の地上に落ちているカンヒザクラの細い枯れ枝を殆ど使用していたが、そのほかにゲッキツの細い枯れ枝、チガヤの枯れ葉等もふくまれていた。

3. 産卵数は 2 個であった。本県に生息するキジバトの産卵数は通常 2 個である。

4. キジバトの抱卵日数は 16 日であり、雌雄交代で抱卵していた。羽田、野沢(1969)によると、夜間は雌个体によって、昼間は雄个体によって抱卵される、ということである。

5. 育雛期の親鳥は抱雛、給餌を雌雄交代で実施していた。

親鳥は給餌するために巢の中で向かい合って座り、頭頸部を動かしながら餌を戻してから嘴を大きく開けると、雛は嘴を親鳥の口内部に入れて餌(pigeon milk)を夢中に飲み込んでいた。給餌後に親鳥は抱雛行動を開始するが、2 羽の雛が就眠すると、間もなく飛去した。

育雛中間期頃の雛は食欲旺盛であり、親鳥は給餌するために日中の帰巢回数を 5 回程に増加し、1 回の給餌時間も長くなり、6 分間を要していた。その頃の親鳥は給餌後の抱雛行動を実施しなくなり、直ちに巢から飛去した。

巣立ち直前になると、親鳥の帰巢回数は 1 日で 1 ~ 2 回程度に減少していた。そして、親鳥は夜間でも抱雛行動を実施しなかった。

雛の巣立ちは孵化日から 17 日目であった。

文 献

羽田 健三、野沢進之輔 1969. キジバトの生活史に関する研究. 山階鳥類研究所研究報告 5 (No.31) 別刷: P. 41~54.

日本鳥学会編 1974. 日本鳥類目録. P. 54. 学習研究社 東京.

池原 貞雄・他 1977. ノグチゲラ *Sapheopipo noguchii* (Seebohm) 実態調査報告(3). P. 43~67. 沖縄県教育委員会.

清棲 幸保 1978. 日本鳥類大図鑑 II P. 488~490. 講談社. 東京.